

『情報社会学会誌』の発刊にあたって

2006年5月

私にとって多年の念願であった情報社会学会の設立が、村井純、大橋正和、國領二郎の各氏のほか、多くの方々のご尽力によって、昨年4月に実現しました。それから1年がたち、学会員の数は着実に増え、三つの分科会での研究活動も活発に行われる中で、このほど紀伊国屋書店の絶大なご支援を頂戴しながら、学会誌が発刊される運びとなりました。たいへん嬉しいことであり、関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

学会誌には招待論文も掲載されますが、その主力をなすのは、いうまでもなく学会員からの投稿論文であり、他の学会と同様、レフェリーによる審査をパスし、必要と認められた場合には、レフェリーのアドバイスにしたがって、さらに手を加えられた論文だけが、オンラインおよびオンディマンドの出版の形で刊行されます。レフェリーは当面、大橋、國領、公文の3名が務めますが、継続刊行の目途がつき次第、より多くの会員の方々にレフェリーの役割を務めていただく体制を整えたいと考えています。

本号に掲載した吉田民人さんの卓抜な科学論に従えば、情報社会学には現在、出現中の情報社会のあり方を、できる限り間主観的に認識しようとする「認識科学」としての側面と、少しでもより望ましい情報社会を、自らの価値観や目的意識にしたがって、主体的に作り上げて行こうとする「設計科学」としての側面の双方があります。前者はさらに、政治、経済、社会・文化、環境など、情報社会のあらゆる側面を、総合的・学際的に認識しようとする広義の「情報社会・学」と、軍事社会における「威のゲーム」や、産業社会における「富のゲーム」を代替・補完する、新しい社会ゲームとしての「智のゲーム」を研究対象とする狭義の「情報・社会学」に分かれます。後者は、吉田さんのいう「自由領域科学」として、設定される設計課題の如何に応じて多種多様な形をとるでしょう。この学会誌は、これらすべての領域にかかわる研究の成果を多面的に掲載して行きたいと思えます。

国連が主催した「世界情報サミット (WSIS)」での活発な議論を見ても、またインターネット・バブルやテレコム大不況を乗り越えて進んでいる情報社会化や情報産業化の流れを見ても、われわれが取り組むべき研究課題は、われわれの眼前に誕生しつつある21世紀の「Oh, Brave New World」の光と影の両面について、ほとんど無尽蔵にあるとの思いを新たにせざるを得ません。情報社会学会員の皆様、とりわけ新進の情報社会学徒の方々の、たゆまぬ研究努力の成果が、この学会誌の誌面を飾り続けて行くことを願っています。

公文 俊平
情報社会学会会長